



次の各問いに答えなさい。

I 次の各傍線部の①～③の漢字の読みをひらがなで、④～⑥のカタカナを漢字で書きなさい。

- ① 粒子の研究をする。
- ② 古い慣習に風穴を開ける。
- ③ 赤い縁取りのハンカチ。
- ④ 意見をコトにする。
- ⑤ 水がタれる。
- ⑥ シハラいをすませる。

II 次の①～④の()に入ることばを漢字一字で記しなさい。

また、それぞれのことわざの意味として最も適当なものをア～カから選び、記号で答えなさい。

- ① () に短し たすきに長し
- ② 鬼の目にも ()
- ③ 雨降って () 固まる
- ④ 立て板に ()

- ア 用心は失敗しないうちにしておくものだということ。
イ 中途半端でどちらの役にも立たないこと。
ウ 相手の出方によってこちらも好意を示そうということ。
エ もめごとのあと、かえってものごとの状態が良くなること。
オ すらすらとよどみなく話すこと。
カ 無慈悲な人でも時には情に負けて優しい態度を取ること。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

(本文に至るまでのあらすじ)

太郎は、あらゆるものに対して好奇心を持つことがない。そのために絵を描いても型どおりの人形やチューリップや電車を描くだけであった。そんな太郎に画塾で子供たちに絵を教えている「ぼく」は、子供らしい好奇心を取り戻させようとして、大自然の中に連れ出した。そして太郎に少しずつ変化が起こった。

川原へ行った日から太郎とぼくとのあいだには細い道がついた。彼はアトリエにやってくると、ぼくにびったり体をよせて、グワツシユを練るぼくの手もとをじっと眺めた。ぼくは貧しいので子供に高価な画材を買ってやれない。市販のものと効果に大差ないことがわかってから、毎日ぼくはアラビア・ゴムと亜麻仁油あまにゆと粉絵具を練りあわせてグワツシユをつくる。ときに高学年の生徒が希望すると、カンバスや油絵具 **A** こしらえてやることもある。ぼくはアトリエの床に足をなげだしてすわり、まわりに子供を集めて、ヘラをうごかしながら話をしてやるのである。太郎はぼくのしゃべる動物や昆虫や馬鹿やひょうきん者の話に耳をかたむけ、よほどおもしろいと顔をあげて、そっと笑った。形のよい鼻孔ひこうのなかで鳴る小さな息の音や、さきの透명한白い歯のあいだからもれる清潔な体温など、太郎の体を皮膚にひしひしと感じながら、ぼくは彼と何度も逃げたコイのことを話し合った。

「水のなかではね、物はじっさいより大きくみえるんだよ。」 **B**、あいつはほんとに大きかったんだ。そうでなきゃ、藻もがあんなにゆれるはずがないもんな。きつとあれはあの池の主だったんだよ」

「……………」

太郎はぼくの話がおわると、澄すんだ眼にうつとりした光をうかべた。それをみてぼくは巨大な魚が森にむかって彼の眼の内側をゆつくりよこぎっていくのを感じた。ぼくは話をしながら彼の眼のなかの明暗や濃淡をさぐって、何度もそうした交感きょうかんの瞬間を味わった。そうやってぼくは彼から旅券りょけんを発行してもらったのだ。画塾には二十人ほどの子供がやってくるが、そのひとりひとりがぼくにむかって自分専用の言葉、像、まなざし、表情を送ってよこす。その暗号を解して、たくみに使い分けなければぼくは旅行できないのだ。

他人のものはぜったい通用を許してもらえないのだ。人形の王国を支配している子には、ぼくはときどき内閣の勢力関係を聞いてやらねばならない。この子は自分の持っているさまざまな人形で政府をつくって遊んでいるのである。

⑤「いまはタヌキかい？」

「いや、象だよ」

「ダルマは隠退したの？」

「うん、ここんとこちよっと人気がないね。あれは階段から落ちて骨が折れたんだよ」

「惜しい奴なんだがね」

⑥「さいづち頭がアトリエに入るとき、なんとなくぼくはそんな挨拶あいさつを交わしあって完全な了解を感じている。

旅券をくれてからまもなく、太郎はぼくの話のあいだに、とつぜん

「先生、紙」

といただきますようになった。それが度かさなって、ぼくが

「おや、また便所？」

とからかうと

「やだな、先生ったら。画を描くんだよ」

そんな軽口をきいて彼はぼくから紙や筆や絵具皿をとっていくようになった。

太郎は新しい核⑦を抱いたのだが、その放射する力がスムーズに流れだすためには時間がかかった。彼の内部にはぼくにも彼自身にも正体のわからない、すつかり形のかわってしまったガラクタ⑧が海岸のようにうちあげられているはずであった。彼はぼくと話をしていうち※2に胎動たいどうをおぼえて紙を要求したが、いざ絵筆をとってみると、どうしてよいのかわからなくなって立往生することがしばしばあった。母親に手をとってもらうか、手本をみるか、いつかおぼえた人形をくりかえすか。こんなことしかやったことのない彼は体内のイメージの力と白紙の板ばさみになって苦しんだ。彼は筆でめちやくちやになぐった紙をもってきて、ぼくにささやくのだった。

「先生、描いてよ。ねえ、こないだのコイだよ、ねえ……」

(開高健『裸の王様』による)

〈注〉※1 グワツシユ……絵の具の一種。

※2 胎動……新しい物事が、内部で動き始めること。

問一 空欄 **A** に入る言葉として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア は イ まで ウ のみ エ ばかり

問二 空欄 **B** に入る言葉として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア だから イ そして ウ だけど エ しかも

問三 傍線部①「……………」で、太郎はどんな気持ちで私の話を聞いていたのですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ぼくの話があまりに空想じみているので、実際に起こった話としてではなく、物語の中の一コマとしておもしろおかしく聞いている。

イ ぼくの話がおもしろければ太郎はそつと笑うはずであるが、今回はそれほど興味が感じられず、黙ったまま聞いている。

ウ ぼくの話から、逃げたコイを捕まえられなかったことを残念に思い、今度はどうやって捕まえようか考えながら聞いている。

エ ぼくの話から、生き生きと巨大な魚が泳いでいる様子を思い浮かべながら、夢中になって聞いている。

問四 傍線部②「そうした交感」とは、誰(何)と誰(何)の交感ですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 太郎とコイ イ ぼくとコイ ウ ぼくと画塾の子供たち エ ぼくと太郎

問五 傍線部③において、「旅券を発行してもらったのだ」とは、どういうことですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 子どもと旅行遊びを一緒にすることを許可されること。

イ 子ども心の心の世界に入って語り合うことを許可されること。

ウ 子どもの空想世界を分析することを許可されること。

エ 子どもと共に一枚の絵を合作することを許可されること。

問六 傍線部④において、「その暗号を解して、たくみに使いわけ」とはどういうことですか。本文中の言葉を使って六十字以内で説明しなさい。(句読点を含みます。)

問七 傍線部⑤において、いまはタヌキがどうであるとたずねているのですか。本文中の言葉を使って説明しなさい。

問八 傍線部⑥「さいづち頭」とは誰のことですか。本文中から十字～十五字で抜き出しなさい。

問九 傍線部⑦「核」を具体的に説明している言葉が本文中にあります。十字以内で抜き出しなさい。

問十 傍線⑧「ガラクタ」とはどういうものですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 描き出してはみたものの、全くうまく描けずに、放り出してしまった絵。
- イ 描く対象としてはあまりにもつまらなく、描くことを途中で投げ出した絵の題材。
- ウ 描こうとしたが、実際に描いてみると全く描けずに放り出してしまったイメージ。
- エ 描こうとして描けないために、いらいらして投げつけて壊してしまった絵筆。

三

次の【A】【B】の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

【A】

わたしは優れた歌人であり医者でもある岡井隆氏から老齡化社会の定義を聞いたことがある。それは若い人で老いた内臓の人がいるかとおもうと、逆に老齡なのに若々しいそれをもつ人がいて、思いもかけない解剖所見になることがあるのが老齡化社会の本質だということだった。通り一遍に予測できないのが老齡化社会の実体だ①というのだ。わたしは通り一遍に理解していた。しかし彼のいうところは深い意味があるとおもう。

動物身体の運動性は人間を除いてすべて反射的なものだ。意志と行為のあいだに分割や間隙がない。人間は意志することと身体運動を起すこととのあいだに時間差があり、そのあいだにあらゆる空想を混じえたり、想像にふけったり、妄想や思い込みにとらわれたりする。これは身体行動を鈍く遅くするが、思考や想像力を豊かに発達させ、言葉を生み出すことに寄与してきた。②

老齡者は身体の運動性が鈍くなっていると若い人はおもっている、それは一見常識的のようにみえるが、大いなる誤解である。老齡者は意志し、身体の行動を起すこと③のあいだの「背離」が大きくなっているのだ。言い換えるにこの意味では老齡者は「超人間」なのだ。これを洞察できないと老齡者と若者との差異はひどくなるばかりだ。老齡者は若者を人間④というものを外側からしか見られない愚か者だとおもい、若者は老齡者をよぼよぼの老衰者だとおもってあなどる。両方とも大いなる誤解である。一般社会の常識はそれですませているが、精神の「有事」になると取り返しのできない相互不信になる。感性が鈍化するのではなく、あまりに意志力と身体の運動性との背離が大きくなるので、他人に告げるのも億劫になり、そのくせ想像力、空想力、妄想、思い入れなどは一層活発になる。これが老齡の大きな特徴である。このように基本的に掴まえていけば、大きな誤解は生じない。老齡者がときどきやる感覚的なボケを老齡の本質のようにみている新聞やテレビ、あるいはそこにでてくる医師、介護士、ボランティアなどのいうことを真に受けると、とんでもない思い違いをして、老齡者を本当のボケに追いやること⑤があり得る。身体の運動性だけを考えれば、動物のように考えと反射的行動を直結するのがいいに決まっている。

けれど高齡者は動物と最も遠い「超人間」であることを忘れないで欲しい。生涯を送るということは、人間をもっと人間にして何かを

次世代に受け継ぐことだ。それがよりよい人間になることかどうかは「個人としての個人」には判断できない。自分のなかの「社会集団としての個人」の部分が実感として知ることができるといえる。

[B]

歩いてはどうてい行けない距離へ行きたいとき、よく自転車に乗った。そしてよく転んだ。不思議におもえたが歩行が不自由なときほど自転車と一緒に横倒しになってしまふ。少し歩行が上達すると横倒しになるまえに片足がつけるようになり、自転車だけ倒れても自分の身体は立ち残れるようになる。

はじめて横倒しになったとき、自転車の下に片足がはさまってなかなか立ち上がれない。そのときまたまた通りがかった近所の中学生に「おじさん大丈夫？」と傍そばに寄って来られたとき、びっくりした。そうかおれはおじさんかとはじめて自覚させられたおもいだった。たしかにおじさんに違いない。自転車と一緒に横倒しになってもたまたましていたのだから。「有難う、大丈夫だよ」といつて立ち上がり、自転車を起こす。こんなことがたび重なるうちに、「有難う」が少し照れながらもスムーズに出るようになった。老齡のはじまりである。情けないことになったと嘆きたいところだが、そうしたらおしまいだとおもうからそのことでは内うち向しない。

テレビを観た。元不良少年だった子供が、老人介護の賃仕事について、介護かいごしている老人から「有難う」といわれたときにはじめて「有難う」という意味がわかったという話が映像ドキュメントのなかでされていた。わたしは善良な少年が真正面から通俗的な正義感をむき出しにしてズルに歯向かう悪ガキの少年になったという話の方が好きだが、老齡化が加担してこのテレビ映像を観ながら、この少年は今に「ア」になるぞと密かに後押ししたいおもいがした。少年は社会的に「有難う」がわかったといっているとはおもわれない。社交以上の「有難う」があることがわかったといっているのだ。老人もまた生涯無数の「有難う」を贈答してきたに違いないのだが、この「有難う」は「期」^⑥「会」の有難うであることを含めていっているのだ。この少年は今に「立派」になるぞ。その立派は社会的地位や知識や富裕者とは関わりない。世間で使われているつまらない立派さを超えた、シモーヌ・ヴェイユのいっている「無名の領域」^⑦での立派のことだ。

「おじさん大丈夫ですか？」などと自転車もろとも若い人にいわれて、平気で「大丈夫です」とか、「有難う」とかいえるようになって、それは老齡化のはじまりだ。そして密かに自分なりの足腰の屈伸や体調の整えがはじまる。

わたしの場合は、最初の老齡についての内省と後悔の時期だった。それまでは大道路を信号の青とともにのろのろと足を運ぶ老人の姿を見て、ただ身体の動きが思い通りにいかなかったのだなくらいにおもっていた。親父が孫に会いに行くんだと杖を片手に駅までの路を繰返し歩行練習していると聞いても親父らしいなと感心したが、こちらの駅までは迎えに行っても家まで一緒に歩かせて、タクシーを呼ぶまでは考え及ばなかった。外から見かける老齡は、いつてみれば我慢の果ての「こぼれもの」のようにみなしている。わたしもそうだった。

自分が老齡の域に入ったとき、まるで違うことがわかった。これは「我慢」と「洞察」と「かくれた努力」を精神の内面に引きこもらせ、外側に運動性の老齡だけを残した老齡体の振舞い方を表しているのだ。わたしが三木成夫の人間の身体の生態論から全面的な啓けい発を受けながら、生態と精神、全体性と「分離」と「二重性」を人間的なものとみなす考えを捨て得ない理由である。わたしの老齡化についての考え方は、わたし自身のすべての考え方に一致するが、ほかの誰とも一致しない。

(吉本隆明『中学生のための社会科』による)

〈注〉※1 間隙……………物と物との、あいだ。

※2 寄与……………貢献すること。役立つこと。

※3 背離……………そむきはなれること。

※4 内向しない……………考え込まない。

※5 シモーヌ・ヴェイユ…フランスの哲学者。

問一 傍線部①「わたしは通り一遍に理解していた」とは、どのような理解ですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 解剖によって老齡化がわかるという理解。
- イ 外見からは老齡が判断しにくいという理解。
- ウ 老人の人口が増え続けているという理解。
- エ 見た目通りに老人は老人であるという理解。

問二 傍線部②「老齡者は『超人間』なのだ」とありますが、「超人間」とはどのような状態を表しますか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 意志と動きとが鈍くなり、人間よりも動物に近づいている状態。
- イ 老齡が進んで、想像や妄想の世界に閉じこもっている状態。
- ウ 意志と身体運動の時間差が大きくなり、動物からは離れている状態。
- エ 若者には理解できない、人間としてさらに進化をした状態。

問三 傍線部③「びっくりした」のはなぜですか。その理由として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 近所の中学生に助けられるとは、思いもしていなかったため。
- イ 自分では意識していなかった、老齡化に気づかされたため。
- ウ 「有難う」という言葉が、自然と口から出るようになったため。
- エ はじめて自転車と一緒に倒れ、そのまま起き上がれなかったため。

問四 傍線部④「そうしたらおしまいだ」の「そう」の内容を、二十字～二十五字で答えなさい。(句読点を含みます。)

問五 傍線部⑤「介護している老人から『有難う』といわれたときにはじめて『有難う』という意味がわかった」とありますが、どのような意味の「有難う」のですか。それが最もよくわかる一文を本文中から探し出し、最初の五字を抜き出ささい。(句読点、記号を含みます。)

問六

ア

に入る言葉として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 善良
- イ 小者
- ウ 有名
- エ 本物
- オ 裕福

問七 傍線部⑥「

□

期

□

会」の空欄に適切な漢字を入れて、四字熟語を作りなさい。

問八 傍線部⑦「『無名の領域』での立派」とはどういうことですか。本文中の言葉を使って三十五字～四十五字で説明しなさい。(句読点を含みます。)

問九 傍線部⑧「生態と精神、全体性と『分離』と『二重性』を人間的なものともみなす考え」とありますが、【A】の文章において、作者は動物と人間を分けるのは何と何が分かれていますか。それぞれ【A】中から漢字二字で抜き出ささい。

問十 本文全体の内容と一致するものを、次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 作者は高齢者は体を衰えさせないように、運動をした方がよいとおもっている。
- イ 作者は高齢者の豊かな想像力は、言葉を生み出す大切なものであるとうったえている。
- ウ 作者は高齢者になることに抵抗感をもちながらも、前向きに受け入れようと考えている。
- エ 作者は高齢者についての映像には、信頼できるものとそうでないものがあると指摘している。
- オ 作者は高齢者について思い違いをしていた、若いころの作者自身の考えを反省している。
- カ 作者は高齢者と若者の差異は、若者の高齢者への無理解がすべての原因だと述べている。

